

観光とまちづくり

これまで相性が悪かった「観光」と「まちづくり」

どう考えてもこれまで「観光」と「まちづくり」は相性が悪かった。

——観光は基本的にビジネスであるが、まちづくりは基本的にボランティアである。

——観光は入り込み客数といった数値が厳然として現状を表すが、まちづくりにはそのような数値基準は存在しない。地域の活性化といった漠然とした気分がある意味で関心事であり、これらを数値化すること自体あけすけな行為のように思えて気が進まないというのがまちづくり関係者の正直な気持ちだろう。

——観光は個々人の努力を基本に成立しているが、まちづくりはみんなでいっしょにやることに意義がある。

——観光は地域経済が主たる関心事であるが、まちづくりの主たる関心は地域社会にある。ところが観光は地域社会とは摩擦をおこしがちである。なぜなら観光によって地域環境が劣化することが往々にしておこるからである。一方で、まちづくりは地域環境を大切にすもの、地域経済に対してはそれほど大きな力を持ち得ない。

このように観光とまちづくりは相容れない部分が多かった。

ところが近年「観光まちづくり」といったことばがしばしば使われるようになり、両者の接点に関心事となってきた。かくいう筆者もこの2月に

「観光まちづくり—まち自慢から始まる地域マネジメント」という編著書を刊行予定である。どうしてこのようなことが起こってきたのだろうか。

観光からまちづくりへの接近

観光がまちづくりへと接近してきている現状は、温泉街を考えればよくわかる。

バブル景気までの温泉街はそれぞれの宿が借金をして巨大なホテルへと変身し、温泉客を宿のなかへ囲い込むことを競い合ったと言っている。お互いの宿はライバルだった。こうした競争はパイが拡大しているときは機能するが、バブルがはじけて以降の日本社会では通用しない。立ち行かなくなったホテルが廃墟のように建っている温泉街でひとり勝ちしても温泉街そのものが沈没していくなれば将来は明るくない。温泉街対温泉街の競争が始まっているのである。

温泉街同士の争いの場では、個々の努力もさることながら、いかに一体のまちとして温泉街そのものをもり立てていくかが命運を分ける鍵となる。そうした行為こそまさに「まちづくり」なのである。

こうした事情は何も温泉街に限ったことではない。

小樽、函館、喜多方、越中八尾、飛騨古川、白川郷、長浜、近江八幡、若桜町熊川宿、高野町、福山市鞆の浦、豊後高田——これらはいずれもこのところ観光客が伸びているまちである。これらのまちに共通しているもの、それはいずれのまちも歴史があり、まちとしての厚みがあることである。かならずしも超弩級の観光資源があるわけ

東京大学 先端科学技術研究センター 教授 ^{にし むら ゆき お} 西村 幸夫



はないが、立ち寄りたくなるお店があり、魅力的な通りがあり、美しい風景があり、楽しげなまちづくり活動があり、話を聞きたくなるカリスマがいて、心躍る祭りがある、そんなまちなのである。

つまり、住みたくなるようなまち、そんなまちが人々を引きつける。

こうしたまちは自由競争社会で自然に生まれてくるわけではない。こんなまちに育ててきた住み手がいるのである。つまり、ここにはまちづくりがある。そんなまちが結果的に観光のうえでも活躍しているのだ。

これを観光の側から考えると、観光客に媚びたテーマパークをつくるのではなく、自分たちが楽しく住めるようなまちをつくること、そのことがそのまま観光客にも喜ばれる、そういったまちをつくるのが肝要なのである。

これこそまさに、観光からまちづくりへの接近である。

まちづくりから観光への接近

同時にまちづくりの側もこれまであんなに用心していた観光へ次第に接近し始めた。まちづくりがサステイナブルであるためには、経済的な自立が欠かせないが、そのためには何らかの収入が外部からもたらされる仕組みが必要となる。特産品のプロモーションや新しい名物の開発、消費者と直接コンタクトする産直などさまざまな方法が試みられているが、なかでももっとも効果的なのが来訪者の増大である。

まち自慢がそのまま地域のマネジメントとなるような手法が次第にまちづくり活動家たちに受け入れられるようになってきたのである。とりわけ将来の定住人口の増大が見込めないような地域では、交流人口へかける期待は大きい。地域のサポーターとして、半ば住人としてもまちに入り込んでくれるような人をそれぞれのまちは求めているのである。

従来は、観光客というと自分勝手に、地域社会に理解がなく、ゴミと迷惑だけをおいていく異邦人といったニュアンスが強かったが、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムなど、そうでない観光のスタイルも増えてきた。また、従来型の観光客であっても訪問がきっかけとなって地域のファンとなってくれる人もいないわけではない。

観光がまちの新しい地場産業として次第に認められて来つつあるのだ。来訪者が増えることによってまちに活力が甦るといことも各地で実証されてきている。

観光とまちづくりの新しい関係を求めて

いま、「観光まちづくり」という新しい言葉とともに、観光とまちづくりの新たな関係を構築する時である。まちに元気を取り戻すためにも、住み手がいきいきとした暮らしを続けることが出来るためにも、まちが経済的にも自立していけるためにも、観光をうまく取り込んだまちづくりが要請されている。それはまた、従来型の観光の変革と再生にもつながるのである。